

津波にのまれた体験をもとに防災講演をする写真家

たかはし ともひろ  
高橋 智裕 さん(48)

ひと



講演するとき、必ず見せる写真がある。街に津波が流れ込む瞬間をとらえた一枚だ。「この後、私は波にのまれます」

2011年3月11日。東日本大震災が起きた日、福島県いわき市のタウン誌カメラマンとして、津波を撮ろうと小名浜港に向かい、流された。数十秒後、海上保安部の庁舎近くに流れ着き、職員に救

われて一命をとりとめた。

あの日、「行ってきます」と言っただけで家を出たままの人が何人もいる。偶然、自分は生き残った。人々の日常を容赦なく奪う災害の怖さ。それを伝え続けなければならぬ。

震災直後に独立し、フリーカメラマンとして風景写真で生計を立てる。全国の自治体や学校などで被災体験や防災の備えの大切さを説く講演は約200回になった。

熊本地震、西日本豪雨、19年の台風19号……。災害のたび、結婚を機に移住した金沢市から現地に赴き、写真を撮り、話を聞く。

「被災者の言葉は生きる教科書。彼らの経験を無駄にはしない」

講演で必ず使う写真がもう一枚ある。写っているのは、津波に襲われた自宅跡で手を合わせて祈る男性だ。男性はここで、当時10歳の娘を亡くした。大切な人を失うつらさに思いをはせ、災害を自分事として受け止めてもらいたい。

「僕の話聞いた人は誰一人、災害で命を落とさせたたくないです」  
文・写真 野田佑介

抑える

「社会経済活動との両立を」  
そのための、吉村知事は

係者によると、繁華街の人の出を減らすため、昨春同様、幅広い施設を要請対象として検討している。

対象を広げるほど、経済に与える打撃は大きくなるが、ある都幹部はこう強調する。「どんなに外出自粛

ロナ対応にあたる幹部官僚は「東京への影響は大きい」と苦悩を漏らす。

首都の経済活動を制限すれば影響は国内全域に及び、期間が長びけば影響もそれだけ深刻になる。  
吉村知事は緊急事態宣言